

## 叫び声は、暖かい風を呼ぶ

佐々木 恵理子

社会は、便利さを求め不便さを嫌いながら生活していると思います。豊かさが幸せであるかのように、快適さを求め時代は発展してきたように思っています。突然の障害の知らせは、戸惑いと不安、先の見えないトンネルの闇に悩むことになる。街には障害者の実態がないかのように見える。年齢問わず障害者になる可能性はあります。

学校教育も障害を持っていく子供と一緒に混じり合って共に学び合う事が少ない。障害の知識は本の一部を読んだり、医師から説明を聞けば理解できる事ですが、問題は生きていく上での不自由さなのです。

障害を持った子供の母親達の声を聞くと、便利な世の中のはずが、飢餓で苦しむ地獄絵の一面を見る思いがします。自分だけが痛みを我慢すれば終わる痛みなら我慢して耐えようと思えます。しかし、その痛み、

苦しみ、辛さが、分かるから、なおさら変えられる事は変えて行きたいと願いは高まる。

障害とは個人だけのものではなく社会との障壁だと思っています。社会が変われば障害の概念は、きつと変わる。意識もかわる。地域の中の人達に知ってもらうだけで安心感があります。教育の中から混じり合って共に学び合う事が必要だと思います。

障害を持つ娘の名前が何度も出てくるので、「真実（まさみ）」と仮名にします。

真実に知的障害があると、保健所で伝えられてから集団行動の練習を始め幼児教室に通いました。その教室に通う子供達は、何らかの障害や病名を持って生まれて来た子供達です。ある日、母親達の話題に幼稚園の話題が出ていました。「障害を持っている子供は私立幼稚園には入れない」と言うのです。私は「そんな事はありえない」と考えていました。長女も長男も自宅に近い私立幼稚園に入園し、2番目の長男が在園している状況で、真実は入園となる予定でした。園長先生を信頼していまし

たし、この幼稚園に入園すると思っていました。結果的に「障害児には、障害児の行くところがある。」と、入園拒否。入園不合格でした。

悲しみをこらえ次の幼稚園を探しました。

少し遠い幼稚園でしたが、真実に障害があることを伏せて「他の子供達に比べると、少しだけ言葉に遅れがある」とだけ伝え面談をしました。その場でOKされ合格となりました。制服の注文や体操着など、手続きも全部終えて同じ幼稚園に通う事になる顔見知りのお母さん達に挨拶もしていました。安心感の元で過ごした3週間、3週間程経ってから、OKされた幼稚園から電話がありました。「障害児は困るのよね」「今日中に入園取り消しの手続きに来てください」「いきなりの冷たい話し方に、凍りつきました。「どうか、お願いします。入園させてください」と、はじめな気持ちでお願いしました。しかし、次に返された言葉は「障害児はごみ、ごみよりたちが悪い。今日、待っているから、今日中に入園取り消しの手続きに来てください。」生きる気力を奪う言葉でした。以前、幼児教室に来ていたお母さんが、「灯油を被ってやろうかと思った」と話し

ていた人がいました。この様な現実があるなんて、実感した事にショックを受けました。

私は入園取り消しに行きました。園についてからインターホン越しの扉が開くまで長かった。園長、副園長さんも誰もいないとのことでしたが、隠れているのが心配でわかりました。事務の方が一人で対応し、いくつかの書類を渡されました。全部の書類に記入しながら、ボタボタと流れた涙がちらばり、汚くなった書類を手渡し、何も言わず帰りました。やるせない気持ちを感じて欲しいと思いました。心が寒くて真っ暗なトネルの中でした。

その後、区役所の学務課へ行き入園拒否があったこと。差別的な言動や幼稚園が決まらず困っていること。保育園も空きがないなど、相談に行きましたが、相談してもどうにもならなかった。

なぜ障害を持っていてどうなるのか聞いてみました。

区内の保育園や私立幼稚園の数と入園を迎える子供達の人数の割合は、ほぼ9割を満たしているとのこと。地域差の集中もあり、障害児の受け

入れをする私立幼稚園が少なく、すべて園長先生の判断にゆだねられているとの事でした。前年度（H14年）私立幼稚園の障害児の登録は3園だけとのことでした。区内の私立幼稚園は42園ある。障害を持っていることを理解した上で入園を認めている私立幼稚園が、たったの3園しかなかった。幼児教室に来ている母親達は、ほぼ他区内の幼稚園に入園を決め、引越しなどの準備の話題がでていました。中には幼稚園を諦めた母親と、諦めず必死に探す母親の姿がありました。

私もやつと他区内の私立幼稚園が決まりました。クリスマスの時期でした。この幼稚園は私立小学校を希望する保護者が多く、格が高いイメージなので障害児の受け入れなどしないだろうと、話題に出ていた幼稚園でしたが、面談では全て正直に園長先生に伝え、命のエネルギーをつぎ込む位に必死な思いでした。

この幼稚園に通うことになってから沢山のことを学びました。幼稚園で働く人達は殆どがシスターです。我が子は教室の中でじっとしている事が出来ず、すぐ教室から飛び出してしまおう子でしたがシスタ

「達は「きつと出来るようになるから、真実ちゃんを信じてあげて」「真実ちゃん、戻って来てね。」と優しく言うのよ。」と、子供達にシスターは教えていました。

私が真実を幼稚園で叱った時に、小さな女の子が言いました。「真実ちゃんを信じてあげて、叱らないで、きつと出来るようになるから」と言い、自分たちが真実の見本になっていると言う自信に充ちた言葉でした。色んな場面で多く人たちが関わり、大きな行事など乗り越え大勢のシスターたちと子供、そして、その子供達のお母さん方が共に達成する充実感を教えてくれました。真実は人の真似をすること、人を信頼すること、心のアンテナを持ち空気を察知する感覚も身につけました。子供は大人の指導しだいで大きく変わると思います。どんな大がかりな事でも、勇氣をもってやり抜くと軌跡も起こると教えて頂きました。

皆と混じり合って、共に学び合う大切さは便利な世の中になればなるほど忘れられていく気がします。

何が正しいか知っているはずなのに面倒なことを嫌い、正しいことを

する勇氣に欠け、楽な方向だけを選ぼうとする人間の弱さがあると思います。暗いトンネルの向こうに光を照らしてくれたシスターと子供達によつて勇氣を学びました。

小学校入学の事についても、地域の小学校に入学することを学校長や教育委員会の学務課が拒み、自宅からかなり遠い小学校を紹介されました。兄弟姉妹が通う小学校に行く事をなせ止めるのか、取り合えず希望通り入学が決まりました。入学後は子供が学校に慣れるまで、親の付き添いをする事が条件になりました。学校に慣れると言う曖昧な言葉が都合良いように解釈され、学校側との戦いのようなものでしたが、校内の保護者達は私の意見に賛成してくれる人も多かったです。「保護者が地域の学校を選んでいる場合は、義務教育中なのだから入学に条件を付けるのはおかしい」と言ってくれる人や「子供に障害があるからと言って普通の保護者と同じ扱いをしていない」と言ってくださる方もおりました。現実のクラスの様子は、真実の言葉の練習をすると言い出す子、図工の時間など早く書き終えた子は、お日様は「こう書くんだ」と、自分の書いた

絵を見せて真似させてくれる子、図書室では本を読んで聞かせてくれる子、音楽も「みんな友だち」と言う歌声に心が温まり、感動の涙が出る事もしばしばあった。そのような状況でしたが、クラスの子供達には直接アドバイスし、遠くから見守り支持する様にしていました。

子供達の何人かに、「こんな時こうして」と頼み、場面を見て次のイメージを話していました。誰かが良い事をする子供たちは素直に真似してくれます。

私は学校の付き添いを強制されていましたが、沢山の子供達がそれぞれ、真実のことを気にして行動する様子を見る事も出来ました。

しかし親の付き添いは、かなり過酷なもので残酷な、親へのいじめです。子供に障害があっても、混じり合って同じ時間を過ごすことで、地域の人達の理解も深まり、多くの人の目が温かいつむじ風となり安心感が生れます。

学校の付き添いは1年間で終わりました。学校長は障害を持った子供の入学に積極的になりました。私はPTA活動の広報誌を制作すること



になりました。

校長先生にインタビューした時の言葉。「教育とは、この子をどうしたのか、強い情熱がなければ、教育は出来ない。優しさが甘さにならないように、厳しさが冷たさにならないように」この言葉を表紙に載せ、普通学級で学ぶ難聴児への配慮や知的遅れのある子をテーマにした広報誌を制作しました。広報誌の制作に積極的だったのは、障害とは無縁の保護者の方々でした。障害があっても無くても共に学び合う事を目的に制作した広報誌は、区内の広報誌コンクールで優秀賞を取ることが出来ました。願う気持ちが多くの人々の目にとまり、評価された事がうれしかったです。また、私立幼稚園制度改正についてもH18年特別支援教育あり方検討委員会が始まり傍聴を続けていました。その中で私立幼稚園への障害児に対する支援の声が上がったものの、何も変わらないままの素通り寸前のところで、パブリックコメント募集の際に小学校PTAの保護者の方々が、私立幼稚園の障害児支援見直しをFAXで意見を流してくれました。

そしてH19年度より私立幼稚園制度の改正がありました。

何もしなければ何も変わらないまままで終わるし、誰も気づいてくれない。何も投げかけなければ、考えて貰う機会もありません。今、出る事に勇気を持って声を上げる事が小さな力となり、奇跡と言う暖かな風が吹くと思います。